

2021年2月14日 久宝教会 信教の自由を守る日礼拝

メッセージ「風が強いからこそ」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 14章22-33節

今日はバレンタインデーです。これはキリスト教の行事のように思われていそうですが、女性が男性にチョコを贈るというしきたりをキリスト教で特に定めているわけではありません。しかし、それではキリスト教と全く関係ないかと言うと、そうでもない。最初にチョコっと、バレンタインデーだけに、その話をしたいと思います。

西暦3世紀ごろのローマ帝国。皇帝であったクラディウス2世は、兵士が愛する者を故郷に残していると士気が下がる、すなわち戦争で命をかけて闘う気のある者がいなくなる、という理由で、兵士たちの結婚を禁止していたそうです。ところが、キリスト教の司祭であったバレンティヌス（バレンタイン）は、結婚を禁止されて悲しむ若者たちを憐れんで、こっそり結婚式を行っていました。そのうちそれが皇帝の耳に入り、最終的に彼は投獄され、処刑されてしまいました。その処刑された日が2月14日だったのだそうです。

そのバレンタインは、獄中でも恐れずに看守たちを相手に神の愛を語ったと言います。パウロみたいです。言い伝えによると、ある看守に目の不自由な娘がおり、バレンタインと仲良くなったと言います。そしてある時バレンタインが彼女の目のために祈りをささげると、奇跡的に彼女の目が見えるようになったのだそうです。これがきっかけとなって彼は処刑されてしまったそうなのですが、彼が死ぬ前に彼女に手紙を残したのが、後世でバレンタインカードとなっていったのだそうです。知らんけど。

いずれにしても、本日はバレンタインデーでもあると同時に、「信教の自由を守る日礼拝」ということでもあります。バレンタインデーのできるきっかけとなった聖バレンタインという人が、実は若者たちの愛のため、自分の信仰・信念のために権力にも屈しなかったということで、この二つの日に思わぬ共通点があったというわけです。

さて、本日お読みした聖書の箇所は、イエスが湖の上を歩く、という話です。5千人以上の人々のために、5つのパンと2匹の魚を、祈りをもって裂き、分け与えるという、大変有名で大きな奇跡（マタイ 14：13-21）を行った後、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、ガリラヤ湖の向こう岸へ先に行かせ、その間に自分は群衆を解散させてから、ひとり山に登って祈っておられたわけです。そして夕暮れが深まってゆく中、舟に乗った弟子たちは、ガリラヤ湖の真ん中で逆風に悩まされていたわけですが、夜が明ける頃、そうやって苦勞している弟子たちの前にイエスが現れた、湖の上を歩いて現れた、と、そのように今日の話は始まっているわけです。

「イエスは弟子たちを強いて舟に乗せた」とあります。逆の立場で考えると、弟子たちはイエスから、舟に乗って湖の向こうを目指し漕ぎ出すように強いられた、ということになります。これは私たちの姿でもあるかもしれません。私たちはみな、今まで歩んできた人生のすべてが自分の思うように運んできたわけではないでしょう。むしろ、小さい頃自分が思い描いていたものとは違う歩みであったことの方が多かったかもしれません。そして、自分の思わぬ歩みであったからこそ直面する悩みなどもあったでしょう。弟子たちもきっと、イエスに示されて船を漕ぎ出しては見たものの、逆風が強くて自分たちがちゃんと進んでいるのかどうかもわからない、これでいいのだろうか、そのような状態だったのでしょう。そんな状態が一晩中続き、「もうわけわからん」「もうだめだ」というその時に、イエス・キリストが、湖の上を歩いて来てくださったというのです。今日のこの出来事は、単にイエス・キリストが、ここからはるか遠いパレスチナの地で、遠い昔に行われた話ではなく、私たちの人生において私たちを襲ってくるさまざまな悩みや惑いなど大小の波や風雨など、まさに逆境にあって打ちひしがれ、しおれてしまっている私たちのために、イエスが今なお働きかけている、働きかけようとして下さっている、湖の上を歩いてこちらに向かおうとして下さっているのだということ象徴している出来事だというふうに思えます。

しかし、強い風と高い波に悩まされている弟子たちは、夜明け前だったこともあって、水上を歩いて近づいて来られるイエスを幽霊だと勘違いし、恐怖のあまり叫び声を上げたとされています。まあそりゃそんな時、まだ

日も昇らない真っ暗な時間帯で、舟を操るのも大変な波風の中、人が歩けるはずもない水の上を何者かが歩いて近づいてくるなんて、僕でも叫びますわ。私たちは自分を取り巻く状況にいっぱいになってしまって心に余裕を持ってないと、その状況の全体像どころか、自分の目の前のことすらきちんと見ること、考えることもできず、自分の目の前にいる相手のことすらちゃんと見ることができなくなるように思います。しかしキリストはそんな余裕のない私たち、疑り深い私たちにこう声をかけられます。「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と。この「安心しなさい」という言葉、別の訳では「しっかりしなさい」とされています。自分を取り巻く状況に取り乱す私たちにキリストは「しっかりしなさい。いつものあなたを取り戻しなさい」と声をかけて励まして下さるのです。

そして聖書では、それに対してペトロが、イエスが助けに現れて下さったのが嬉しかったのかも知れませんが、「主よ、あなたでしたら、私に命令して、水の上を歩いて御もとに行かせて下さい」と頼みます。ペトロは「俺も水の上を歩きたい」と思ったわけではなく、ただ嬉しくて信頼するイエスのそばに行きたくて、イエスが舟まで来られるのを待つこともできなくて、イエスの元に行かずにはおれなかったのです。よくボクシングの世界戦なんかで、決着がついた瞬間、勝者の側のセコンドがリングの中になだれ込む様子を思い出します。行かずにはおれないのです。私たちは、私たちの救い主であるイエス・キリストをこれほどまでの思いで待ち焦がれているのでしょうか。このペトロの純粋な思いに、私たちは学ぶところが大変大きいように思います。

しかし、イエスを認めて飛び出さずにはおれなかったペトロは、舟から降りて水の上をイエスの方に進んだものの、強い風、あるいは足元に広がる海に気が付いて恐くなり、沈みかけます。「主よ、助けて下さい」。彼は何で沈みかけたのか。それは、ペトロがイエスだけを見ないで、強く吹きすさぶ風を見てしまったからです。上下に揺れておさまらない足元の海を見てしまったからです。イエスから別の所に目を向けて怖くなったからです。ペトロは逆境の中でイエスの姿を認め、そこだけを見て踏み出したからこそ、水の上であろうと歩むことが出来たのに、ふとイエスから、強い風や足元の大波に目を転じた時、イエスを見ている限り感じる事のなかった

不安や恐怖がペトロを襲い、彼は沈み始めたわけです。だから私たちは、キリストの姿から目を離してはいけません。私たちは日常の中で、いろんなことに気をとられながら日々を歩んでいる。イエスのことよりも先に、自分の中の常識や世の中の価値観を思ってしまうことがある。それでは私たちは湖の上で一步を踏み出すどころか、きっと沈んでしまう。だから私たちは、むしろこの世の風が強いからこそ、この世の波が高いからこそ、イエスのみを見つめてゆかないといけません。

「イエスのみを見つめる」とはどういうことか。それは、私たちの日常の様々な1コマ1コマで、「ああイエス様ならこういう時にどうされたであろうか、キリストならこういう時にどう言われるであろうか」。そのように自分たちの歩む日常の1コマ1コマでイエス・キリストのことに思いをめぐらせて考えること。それがキリストと共に歩むということであり、キリストを見つめて歩むということです。きっと、聖バレンタインもキリストだけをいつも見つめていたのでしょう。実際、この世の波というものは思いのほか激しく、この世の風は思いのほか冷たく強いものだったりしますが、イエス・キリストだけを見て歩いていけば、海の上であろうと、私たちは決して沈むことはない。たとえ沈みそうになっても、キリストは必ずすぐに手を伸ばしてこの私を引き上げて下さる。私たちはそう信頼して、風が強く波が高いからこそ、イエス・キリストだけを見つめながら、嵐に波立つ海に足を下ろしてゆきたいものだと思います。